表に出ろいっ! English version “One Green Bottle”

作・演出：野田秀樹
英語上演・イヤホンガイド（日本語吹き替え）付
吹き替えキャスト：父／大竹しのぶ 娘／阿部サダヲ 母／野田秀樹

アートディレクション：吉田ユニ

目にも耳にも新しい『表に出ろいっ!』が誕生

伝説の舞台として封印されるかと思われた『表に出ろいっ!』が、国際的な俳優を配し、全編英語で蘇る。新生バージョンの内容を野田秀樹に聞いた。

爆笑、のち、恐怖だった初演

2010年、満を持して上演された『表に出ろいっ！』は、公私共に盟友だった十八代目中村勘三郎と野田秀樹が、客席数300に満たない濃密な空間でがっぷり四つに組んだ作品だった。熱量ある動きとスリリングなアドリブにも見えるような応酬は、このふたりだからこそと観た誰もが思った。そのわずか2年後に惜しくも勘三郎はこの世を去り、再演は難しいと考えた人も少なくなかったはず。

「彼にとっても特別な気持ちの芝居になっていたと思います。『70歳ぐらいになったらまたやろう』と話していましたし、病室にもこの作品のDVDを置いていて、お見舞いに行くと看護婦さんに僕を指差して『これ（DVDの妻役）が、これ』ってやったり」

と、野田自身も振り返る。

『表に出ろいっ！』は、夫、妻、娘それぞれに、家族には理由を知られたくないものの、どうしても外に出かけたい用事があり、しかし飼い犬の出産が間近に迫っていて、誰かが家で世話をしなければならないという一夜の騒動が描かれる。犬は心配だが自分だけは外出したい3人のやり取りは、嘘や屁理屈、相手の悪口や脅しの応酬へと発展。たたみ掛けるテンポと、飛び出す言葉の切れ味、ヒートアップして見えてくる本音や弱みが客席の爆笑を生んだ。しかしやはり野田作品のこと、白い壁にうっすら見えていたシミが知らぬうちに広がり、気が付くと四方を真っ黒な壁に囲まれている瞬間が待っている。

勘三郎のやったことをなぞるのは申し訳ない

そんな作品の再演の決め手になったのは、やはり俳優だった。『THE BEE English version』など、これまで何度も共演してきたキャサリン・ハンターなら託せるのではないかと、野田がイメージしたことで企画が動き出した。ちなみに『THE BEE』でもそうだったように、『表に出ろいっ！』でもキャサリンと野田は役の性別を逆転させ、勘三郎が演じた夫をキャサリン、その妻を野田が演じる。黒木華と太田緑ロランスがダブルキャストで演じた娘は、これまた男性のグリン・プリチャードが配された。3人はすでにイギリス・ロンドンでのワークショップを重ね、現地の演劇関係者を招いてのショーケースも行った。

「反応はとても良かったです。ロベール・ルパージュ（フィジカルシアターの世界的演出家）も来てくれて『おもしろかった！』と言っていました。ただ、初演ほどドタバタにはなりません。やはり彼らは理論で動くし、勘三郎がやったことをなぞるのは彼にも申し訳ない。英語版ならではの作品になると思います」

実はラストも含め、ストーリーも変更があるという。キャストとのディスカッションを経て、より多くの観客にリアリティが伝わること、初演から時間が経った分、時代に即した展開を考え、戯曲の手直しも行った。

「翻訳をどうしようかと考えている時に、イギリスで注目されているウィル・シャープという、まだ30代前半ですけどとても才能がある劇作家を紹介されて。彼はお母さんが日本人で日本語も少し喋れるし、シェイクスピアなどの古典にも詳しい。直訳ではなく、翻案をお願いしました」

その結果、日本語タイトルはそのままだが、英語タイトルは『One Green Bottle』に。これはイギリスの古い数え歌の一節だそうで、なぜこのタイトルかは観てのお楽しみ。衣裳も美術も再考され、耳にも目にも新しい『表に出ろいっ！』が誕生する。せりふはすべて英語だが、字幕なども検討した結果、国内上演は日本語吹き替えのイヤホンガイドを選択した。

「大竹しのぶさんと、阿部サダヲさんにイヤホンガイドの日本語吹き替えをお願いしているので、きっと良いものになると思います。それにしても、夢の遊眠社時代にエディンバラのフェスティバルに招待され、それがきっかけでロンドンに留学しましたけど、招待から30年後に国内外で英語の公演をするとは考えていませんでした。歌舞伎も同じで、まさか自分が関わるとは思ってもいなかった。でも、せっかくそういう数奇な運命にあるので（笑）、きっかけをくれたキャサリンや勘三郎との出会いを大事にして、それぞれ全うしたいですね」

豊かな物語世界を貫き、時代を射抜きながらも、ますます拡大していく野田の活動は、同時代を生きる幸運を得た者として、見逃すわけにはいかない。

取材・文：徳永京子

11月1日（水）～11月19日（日） シアターイースト
詳細はP10へ
※プレビュー公演 10月29日（日）・31日（火）

作・演出：野田秀樹 written and directed by Hideki Noda
英語翻案：ウィル・シャープ　演奏：田中傳左衛門
出演：父／キャサリン・ハンター “Father” Kathryn Hunter
娘／グリン・プリチャード “Daughter” Glyn Pritchard
母／野田秀樹 “Mother” Hideki Noda

東京芸術祭 2017 世界をチカクする
tokyo-festival.jp
本プログラムは東京芸術祭2017の一環として開催されます。

キャサリン・ハンター

グリン・プリチャード

野田秀樹

田中傳左衛門

リチャード三世

作：ウィリアム・シェイクスピア
演出・上演台本：シルヴィウ・プルカレーテ

怖いけれど愉快な王の姿を、一緒に探ろう!

今年の初夏、佐々木蔵之介はルーマニアのシビウ国際演劇祭を訪れ、『リチャード三世』を演出するシルヴィウ・プルカレーテと、王の魅力を語り合った。

対談の前夜、佐々木蔵之介はシルヴィウ・プルカレーテ演出作品を初めて生で観賞した。それは屋外の水を張ったプールで、ラドゥ・スタンカ国立劇場の俳優たちが演じる『メタモルフォーゼ』（2007年初演、オウィディウス作『変身物語』に基づく）。ギリシア・ローマ神話の登場人物たちが変身していく同作の印象から、佐々木は話しだす。

「圧倒されましたね。なんて尊い芝居だろう……、そう感じたのは火と水を使うからかな。謝肉祭のような、神々しいものを見せていただいた気がしました」

プルカレーテは笑顔で応じる。

「ありがとう。祝祭に通じる空間を目指した私の意図を、しっかり受け止めてくれましたね。戯曲に沿って物語を追う舞台とは違って、『メタモルフォーゼ』は複数のエピソードをつなぎ、言葉では伝えられない人間の本質を導き出す作品です」

「神聖な演劇である一方、俳優が野菜や肉を実際に食べるなかで、ばんばんエネルギーが迫ってくる。その勢いに驚きながら『おれはリチャード三世を、こういうふうにはできないぞ』と思いました（笑）。稽古場には、いったい何がくるのか？ 楽しみなような、不安なような気持ちに包まれました」

「私は頭の中で方針を固める演出家ではありません。俳優のプランも取り入れ、試行錯誤を重ねます。ぜひ、蔵之介の意見も聞かせてほしい」

10月に上演するシェイクスピア作『リチャード三世』（1591年初演）のタイトル・ロールは、権力を求めて暗躍した15世紀のイングランド王。世界の名優が挑む複雑な人物を、どう佐々木はとらえているのだろう。

「すがすがしいほどの悪党を演じよう、と戯曲を読んだ直後は思いました。感銘を受けるほど、悪いことしかしない極端な人間を演じるのは気持ちいいだろう、と予測して……。冷酷なエゴイストですが、共感できる部分もあります」

野望にとりつかれた男の滑稽さも表現したい、と続ける。

「自分を憎む前王妃の娘に求婚したり、リチャードの行動は常識を超えています。でも観客は、彼の言葉には無理がある、と感じながらも笑ってしまうでしょう。そんな場面を、僕も面白がって演じたいですね」

男性俳優が演じる女性役にも、新鮮な工夫を凝らす

「蔵之介の言う通り、愉快なシーンも多い芝居です。ユーモアと発想力に富む悪徳の化身は、演劇史における巨大な記念碑とも呼べる存在。道徳に縛られずに突き進む姿は、見る側をわくわくさせます。リチャードは人々が胸の底に秘めている欲望を目覚めさせる。最後に罰を受けて死ぬ瞬間まで、客席の視線は彼を追わずにいられません」

「たしかに僕が演じるリチャードは観客を挑発するし、劇中の人物を惹きつける力も強い。たとえば、自分が前夫を殺したアンを巧みに口説き、妻にしてしまいます。今回の舞台ではアンを男性俳優（手塚とおる）が演じるから、特別な効果が出るかもしれません」

「女性の声や所作のまねとは違う、抽象的ともいえる女性役を演出したい。ほぼオールメール・キャストになったのはオーディションの結果ですが、シェイクスピア時代の英国でも男性俳優が女性役を演じました。歌舞伎と同じように」

プルカレーテ演出を特徴づけるエロティシズムとグロテスクな要素は、初めて日本の俳優たちを演出する舞台でも発揮されるだろうか。

「女形の官能を保ちつつ、新しい美を誕生させる工夫が鍵かな……。おそらく演出プランを具体化する過程で、日本の言葉も習慣も分からない私は、多様な問題にぶつかるでしょう。対立も含めて、異なる者同士の共同作業が画期的な案を育む、と期待しています。互いを信頼し合い、協力して進みましょう！」

佐々木は身を乗り出して、うなずく。

「今、僕には分からないことが山ほどありますが、稽古場で考えていきます」

「私自身も疑問でいっぱい（笑）。迷いや不明点を探っていく作業こそ、まさに演劇なのです」

取材・文：桂真菜（舞踊・演劇評論家）

10月18日（水）～30日（月）プレイハウス
※プレビュー公演 10月17日（火）

詳細はP10へ

作：ウィリアム・シェイクスピア　翻訳：木下順二
演出・上演台本：シルヴィウ・プルカレーテ
出演：佐々木蔵之介／
手塚とおる　今井朋彦　植本純米（植本潤改メ）／
長谷川朝晴　山中崇／
山口馬木也　河内大和　土屋佑壱　浜田学　櫻井章喜／
八十田勇一　阿南健治　有薗芳記　壤晴彦／渡辺美佐子

東京芸術祭2017　世界をチカクする
tokyo-festival.jp
本プログラムは東京芸術祭2017の一環として開催されます。

オセロー

作:ウィリアム・シェイクスピア
演出:イヴォ・ヴァン・ホーヴェ
〈日本初演〉オランダ語上演・日本語字幕付

©Jan Versweyveld

世界を席巻する超人気演出家 ついに東京初登場!

本拠のオランダを始めとするヨーロッパ圏はもちろん、ニューヨークのブロードウェイのように、見巧者から観光客まで幅広い層をターゲットにしたショービズ界においても、いまや信頼のブランド。ベルギー出身のイヴォ・ヴァン・ホーヴェほど、あまねく世界中で高評価をキープしている演出家はめずらしい。真実を見据えた冷徹な視線で、作品の本質に大胆に肉薄しながら、過激な表現には眉をひそめがちな観客層にも、熱く支持される。理想的な離れ業で世界を味方に付けている、特別な才能の持ち主だ。

「すべての演劇は現代劇であるべき」と言うヴァン・ホーヴェは、『オセロー』においても、現代のヴェニスおよびキプロスとして違和感のない、架空の軍服を調製。それを単なる時代および状況設定のためだけでなく、権力、組織、野心、建前、暴力、(私に対する)公、といった社会的記号として、有効に機能させている。オセロー自身の軍服の扱いや着脱のしかたが、彼の心の内を雄弁に物語っているのだ。また、「人間は生来、他者を排斥しようとするものです。他者=黒人やゲイとは限りませんよ。今あなたの隣にいる人だって他者なのです」ともヴァン・ホーヴェは言い、差別の絶望的な根深さを浮き彫りにしてみせる。「白いオセロー」と評判になったキャスティングは、その一例といえるだろう。英米の上演ではアフリカ系の俳優が演じ、日本では肌を黒く加工するのが慣例化しているオセロー役。そのいずれもが、この『オセロー』を前にすると、狭隘な固定観念に基づく浅薄な発想に思えてくる。

いたるところで、虚を突くように鮮烈なリアリティが噴き出すイヴォ・ヴァン・ホーヴェの『オセロー』。世界中の賞賛が決して大げさではないことを、この舞台でしっかりと実感できるはずだ。

取材・文:伊達なつめ(演劇ジャーナリスト)

11月3日(金・祝)〜5日(日) 詳細はP11へ
プレイハウス
作:ウィリアム・シェイクスピア
演出:イヴォ・ヴァン・ホーヴェ
出演:トネールグループ・アムステルダム

イヴォ・ヴァン・ホーヴェ

tokyo-festival.jp
本プログラムは東京芸術祭2017の一環として開催されます。

芸劇dance
イデビアン・クルー

肩書ジャンクション

振付・演出:井手茂太

井手茂太率いるイデビアン・クルー 渾身の新作ダンスを見逃すな!

振付家・ダンサー井手茂太率いるイデビアン・クルーの最新作が満を持して、東京芸術劇場に登場!

イデビアン・クルーの舞台作品には、いつもダンスカンパニーとは思えないような不思議なタイトルがついている。ところが、実際に公演を見ると妙に納得、というか腑に落ちるからこれまた不思議だ。今回の新作タイトルは『肩書ジャンクション』!「“肩書ジャンクション”って一体なんだ!?」ということで、井手茂太本人に、今回の新作の見どころや構想について聞いた。

「“肩書”というのは、以前からずっと引っかかっていたキーワードなんです。自分が何者なのかを指し示す何かではあるんだろうけど、もしかすると少しフィクションも入っているかもしれない“肩書”という得体のしれないもの。そしてそれを、縦横無尽に交差する“ジャンクション”と結び付けてみました。言葉の響きもいいし、略すと“JCT”っていうところも好き(笑)。様々な個性を持ったユニークなダンサー達が9人集まり、“肩書”というモチーフを巡り、くんずほぐれつ交わりまた離れていく“ジャンクション”的世界・・・そんなイメージを言葉抜きのダンスで表現できたら」

20年以上に渡り日本のコンテンポラリー・ダンス・シーンを牽引し、野田秀樹や三谷幸喜などの演劇作品での振付や、椎名林檎、星野源ら多くのアーティストMVなども手掛ける井手茂太/イデビアン・クルーの新作にご期待ください!

取材・文:編集部

10月20日(金)〜22日(日) 詳細はP10へ
シアターイースト
振付・演出:井手茂太
出演:斉藤美音子　菅尾なぎさ　福島彩子
後藤海春　酒井幸菜　中村達哉
原田悠　三橋俊平　井手茂太

井手茂太

tokyo-festival.jp
本プログラムは東京芸術祭2017の一環として開催されます。